

(続紙 1)

京都大学	博士（地域研究）	氏名	MASSE MA CALISTE OMAM
論文題目	Participatory Forest Management for Sustainable Development in Southeast Cameroon (カメルーン東南部における持続可能な開発のための参加型森林マネジメント)		
(論文内容の要旨)			
本論文は、コンゴ盆地とりわけカメルーン共和国における森林マネジメントの現状と問題点を文献レビューとフィールドワークをとおして明らかにし、住民主体の森林マネジメントの実現にむけた課題と展望について論じたものである。 第1章では、コンゴ盆地における森林マネジメントにかかわる先行研究をレビューしたうえで、本論文の関心と目的について述べている。 第2章では、研究方法と分析枠組みを提示するとともに、調査地の概況について記してある。フィールドワークをおこなったのはカメルーン東南部に位置するブンバ・ベック国立公園およびンキ国立公園の周辺地域で、狩猟採集民バカと焼畑農耕民（主にコナベンベ）の居住域である。 第3章では、コンゴ盆地の6か国（カメルーン共和国、コンゴ民主共和国、コンゴ共和国、ガボン共和国、中央アフリカ共和国、赤道ギニア共和国）における森林マネジメントへの住民参加にかんする文献を対象としたシステムティック・レビューをおこない、森林マネジメントへの住民参加の課題を特定した。まず、条件に該当する121編の文献を抽出し、各々の文献で記述されている住民参加の程度と質について、6つの指標（包摂性、代表性、公平性、情報共有、協議の有無、透明性）にもとづいて記述内容を分析した。その結果、住民参加の程度は概して低調であり、参加の質は包摂性と代表性については「中程度」、公平性、情報共有、協議の有無、透明性については「悪い」と評価した。文献の記述から特定した主要因は、実際の土地利用と法制度に齟齬があること、トップダウンのマネジメントであるため住民のニーズが考慮されていないこと、公的機関によるモニタリングが不十分であること、マネジメントに参加するための住民の能力が低いことであった。 第4章では、カメルーン東南部のビントム村およびマレア・アンシアン村にて計80人を対象に実施したタイムサンプリング調査をもとに、民族、性別、村によって各生業活動に割く時間と非木材林産物の採集量に差があるかどうかを検証した。その結果、民族間、性別、村によって利用状況が異なるものの、とりわけバカの女性にとって非木材林産物の採集が重要な生業活動であることが明らかになった。 第5章では、カメルーン東南部で実施されている森林マネジメントにかかわる複数の制度（保護区、木材生産、観光狩猟、コミュニティ・フォレスト等）から住民にあて			

がわれる利益の分配においてグッドガバナンスが実現しているかどうかを検証するために、住民によるフォーカス・グループ・ディスカッションと各制度にかかわる重要人物へのインタビューから実態把握を試みた。その結果、各制度における利益配分にかかわる意思決定者および受益者は、管理委員会や各村の有力者、地方都市の首長、議員などに限定されており、住民は、自分たちが便益を享受できていないと認識していることがわかった。住民の不満としてもっとも強調されたのは、諸制度の導入によって生じるようになった、非木材林産物の採集や狩猟のための森林へのアクセスにかかわる他の利害関係者との競合・衝突であった。

第6章では、前章までの内容を総括したうえで、森林マネジメントへの住民の積極的な参画を実現する方法について論じた。現状の森林マネジメントは住民の森林へのアクセスを制限する傾向が強く、それは地域住民の生業に大きな変更を強いることで、森林・生物多様性保全の取り組みを弱体化させていた。森林・生物多様性保全と持続的な開発が両立する森林マネジメントを実現するためには、住民の生業の多様性を認識したうえで、現状のマネジメントにおいて制限されている住民の権利、とりわけ非木材林産物を採集するための森林へのアクセス権を回復しつつ、他の利害関係者との競合・衝突を低減することにより、地域住民の森林マネジメントへの積極的な参画を引き出す必要があると結論した。